

佳作

図書館の存在意義を問う

こみやりな
小宮梨菜

(東京都/田園調布学園高等部二年)

【序章】

これから言う光景を頭の中で描いてほしい。子どもたちが楽しそうな声を上げながらコンピュータゲームで遊んでいる。老人たちがデジタル機器を使いこなしている。気難しそうな貴婦人が大量の写真や映像を見ている。これら全てが図書館の中で行われていることだと想像した人はいらるうか。私達が今まさに感じたこの「意外」という感情こそが、今回私が言及したいことである。

【第一章 図書館の起源と日本伝来の経緯】

初めに、図書館の歴史を振り返りたい。かの有名なアレクサンドリア大図書館を始

めとし、今日に至るまで世界中では様々な図書館が置かれてきた。島国であった日本はその伝来が遅れたが、戦後のGHQの支配下の時代にイリノイ大学図書館長兼図書館学校長のロバート・ダウンズ教授による慎重な審議のもと、慶應義塾大学文学部の一部として「日本図書館学校」が置かれた。ここで今回のテーマである自我作古について定義したい。自我作古とは「前人未踏の新しい分野に挑戦し、たとえ困難や試練が待ち受けていても、それに耐えて開拓に当たるといふ、勇気と使命感を表した言葉」(※1)、つまり「西洋文明をいち早くとりいれて、日本の近代化に貢献せん」(※2)ということの意味している。私は福澤諭吉による図書館制度の導入はまさに自我作古

であると考え、今回このテーマで図書館について論じることに決めた。

【第二章 私にとっての図書館】

高校進学後、私は大学受験に向けて進学する大学を考え始めた。取り敢えず気になった大学のパンフレットを手にとってみたが、どれも難しい専門用語ばかりが並び、どのように進学先を決めるべきなのか悩んでいた。そんな中、小さい頃から読書好きだった私は大学の図書館のページに惹かれていった。思い返してみれば、現在通っている高校もその綺麗な図書館に惹かれて入学を決めていた。その頃から私の中で図書館は特別な存在であったのかもしれない。その後は大学選びに必ず「図書館の設備が充実していること」を条件として加えるようになった。やがて私の興味は大学のパンフレットに収まらず、次第に世界中の図書館の中から理想の図書館を見つけたかと思うようになった。そうしてネットや本で探していくうちに辿り着いたのが、ニューヨーク公共図書館だった。そこでふと思いついた。昨年ニューヨークに短期留学をした際に目の前を通り過ぎていたのだ。その時は時間の都合で中には入れなかったが、隣

接する公園のあまりの綺麗さに「また絶対にここに帰ってこよう。」と心に決め、携帯に位置情報をマークしておいたのだった。それから数ヶ月後、驚いたことに学校の図書館から「映画『ニューヨーク公共図書館』と一緒に見に行きませんか。」という便りが届いた。その映画を通して、私は外観だけではない、ニューヨーク公共図書館の本当の魅力に気付かされた。これを機に私は図書館について調べ始めたのである。

【第三章 日本の図書館の現状】

第一章では図書館制度が日本に入ってくるまでの経緯を述べたが、本章ではそこから現在に至るまでの図書館の変遷を述べたい。戦後間もなく日本は図書館法を起草し、社会教育と文化振興の機関という位置づけで各地方自治体による図書館が置かれるようになった。国民に広く開かれた知を享受する場として長くその地位を保ってきた図書館であるが、近年ではその立場が危惧され始めている。

日本図書館協会の調べでは一人あたりの年間貸出数はフィンランドが十八冊であるのに対し、日本は五・六三冊(※3)と圧倒的に少ない。また電子書籍の登場により

「近い将来図書館はなくなるだろう。」「そもそも図書館はいるのか。」といったことが囁かれるようになった。実際私も電車に乗る際に電子書籍を読んでいる人を何度も見かけるが、その人数が日々増え続けているように感じる。つまり日本では図書館の利用者数が減少してきているのだ。加えて行政による分配資金の削減が行われており、それに伴い非正規雇用の図書館員が増えてきている。すなわち、日本の図書館は現在瀕死の状態に晒されていると言える。

利用者側の意識はどうだろうか。岩手県で生まれた私は幼い頃よく母に連れられて岩手県立図書館に通った。大阪に住んでいた頃は移動図書館も利用していた。しかし大きくなるに連れて次第に図書館から足が遠のくようになった。というのもも人気(ひとけ)の少なさから寂しさを感じたり、勉強している学生のピリピリした雰囲気圧倒されてしまうことが多いからだ。これは多くの人が感じていることだろう。厳しい言い方をするとう図書館にはただの書庫もしくは自習室といったイメージが根付いてしまっているのかもしれない。このことも図書館の利用者数の減少の一因となっている気がする。

【第四章 海外の図書館の活動】

映画「ニューヨーク公共図書館」を見て、私はその独創的かつ合理的な活動に幾度となく驚かされた。私の図書館に対する見方が変わった瞬間であった。本章では海外の図書館、特にニューヨーク、ノルウェー、オランダの様々な活動について触れようと思う。

図書館はその名の通り本を取り扱う場所であるが、海外ではその活動が図書館の枠組みを超えて多岐にわたる。例えば、ニューヨーク公共図書館は四つの専門性に特化した研究図書館と八十五の地域分館で成り立っており、この研究図書館ではニューヨークの経済や芸術、文化までもを支える役割を担っている。アメリカン・ドリームで知られるニューヨークだが、その背景にはどんな小さな芽も潰さない、全ての実業家を全面的に支援するシステムがある。それが科学産業ビジネス図書館である。ここでは書籍はもちろん、普段は見られないデータベースなど、ビジネスに関するありとあらゆる情報が手に入る。また舞台芸術図書館では、演劇や映画など全ての芸術に関する資料を見ることが出来る。これもまた二

ユーヨークが演劇の本場と言われる由縁である。更に、黒人文化研究図書館というものもあり、まさにニューヨークという土地ならではの図書館である。

その土地ならではないえば、ノルウェーの図書館でも同じような理念が存在する。ノルウェーではブックモールとニーノシユクという二つの公用語が使われている。ニーノシユクの使用者は少ないが、教科書は必ず二種類の言語での出版が義務付けられている。このようにノルウェーでは文化の保護が重要視されており、それを保存する場所として図書館がある。

同じように文化の保存という役割を担っている図書館が日本にも存在する。東京・三鷹にあるアジア・アフリカ図書館である。一九五八年に開館したこの図書館は約二〇、〇〇〇冊のアジア・アフリカ諸国に関する原書、英語図書、日本語図書が所蔵されている。ただしこれは公益法人であるため公共図書館ではなく、その点において日本は諸外国と比べると遅れをとっていることがわかる。日本の図書館はその土地に役立つ図書館作り、というものがまだ不十分である。これが本来の図書館のあるべき姿のように思うので、本当に残念で仕方がない。

もちろん図書館にとつてはその原点である「本の提供」も大切な仕事である。移動図書館をご存知だろうか。ワゴンに乗せて本を届けるサービスであるが、実はこれが発展途上国や自然災害の被災地の復興支援につながっている。シャンティ国際ボランティア会はアジアの七つの国でこの活動を行っている。実際に東日本大震災の際には「走れ東北！移動図書館プロジェクト」と称して東北の人々の元へたくさんの本を届けた。シャンティはボランティア団体であるため厳密に言うと図書館の活動というカテゴリから外れるかもしれないが、これも立派な図書館の魅力の一つである。

また近年では「全てのメディアを取り扱う場所」として図書館が目ざれ始めている。日本ではめつたに見かけないが、本や新聞はもちろん、写真や映像、インターネット、更にはテレビゲームまでもが図書館に置かれ始めてきている。それに伴い、飲食やおしゃべりができる空間そしてイベントをも兼ね揃える図書館が登場してきた。こうした傾向から、最近では新たな人との出会いを求めて図書館にやってくる人もいる。もしかするとこれをきっかけに今まで図書館を利用することがない人も図書館を

利用し始めるかもしれない。いずれにせよ図書館が人々のコミュニティの場所となることは素晴らしいことと考える。

【第五章 図書館の相互利用】

第二章で私は大学を決めるにあたり図書館を重要視するという話をしたが、その中で一つの魅力的な活動を見つけた。他大学同士の図書館の相互利用である。例えば東京外国語大学や国立音楽大学、国際基督教大学、津田塾大学、武蔵野美術大学、東京経済大学では協定が結ばれており、それぞれの学生が互いの大学図書館を自由に行き来できるようになっている。たぐさんの書物に触れ研究することを求められる大学生にとつて、この活動は極めて画期的である。だが現時点では多くの場合、一部の大学のみの間でしか相互利用が行われていない。

ノルウェーには国の図書館の全てに適応される「全国共通図書館貸出カード」というものがある。二〇〇五年に始まったもので、その中にはもちろん全ての大学図書館の利用も含まれている。日本では大学図書館は学生だけが使う空間にしたいという考えが根付いているため、それを変えることは容易ではないだろう。そこでオランダで

導入されている段階式の会員制度を参考に

してはどうだろうか。オランダでは無料の子供用カードが一種類、値段別の大人用カードが三種類の計四種類のカードがある。大人用のカードは料金によって付随する特典が違う。ここで私は日本でも全国の大学図書館の相互利用を可能にするべく、三種類のカード制度を日本に導入することを提案したい。一つ目は十八歳までの子が持つもの、二つ目は全国の大学が連携して相互利用を認め大学生のみが持てるもの、三つ目は十八歳以上の大人が持てるものである。大学生のみのカードを作ることで学生は勉学に集中でき、更に前述したような相互利用を促進できるだろう。また子供と大人で分けた理由は、子供のパソコンなどの利用を避けるためである。第四章で私は図書館は全て同じではなく、その土地に役立つ図書館”として少しずつ変えていく必要があると述べた。つまり、いずれは一つの愛用図書館に通う世の中は終わりを告げ、人々が用途に合わせて図書館を選ぶ時代になるのではないかと考え、そのためこのような全国共通カード制度を提案した次第である。活字離れが懸念されている昨今、これがどれほどの効果をもたらすか試

してみる価値はあると考える。

【第六章 司書から考える図書館】

ここまで長々と図書館について論じてきたが、本章では司書という観点から論じていきたい。今回私が図書館に注目するに至った理由の一つとして、学校司書の先生との出会いがある。昨年の夏、世界史のレポートを書く際にどの本が一番自分のニーズに合っているかが分からず困り果てた結果、司書の先生に助言を求めたことがあった。それからそのレポートに関する本やおすずめの本が入ると担任を通してお便りをももらうようになった。以前は、図書館は何となく敷居が高いように感じていた。無論そんなことはなく、今は楽しく利用させてもらっている。今回もこの小論文を書くにあたって、レファレンスはもちろん、司書という職業としてインタビュにもお答えいただいた。このような経緯があったからこそ、司書という職業に着目したのかもしれない。司書資格をとるには四年制大学や短期大学、通信制大学等で必要な科目を履修するか、三年以上の実務経験を積む必要がある。また、公立の学校では学校司書が必ず一人以上いるとは限らず、複数の学校を一人の

司書が掛け持つこともある。公共図書館であっても常任司書がないところが存在するようだ。気軽に相談できる司書が学校に二人もいる私にとって、この事実は衝撃的であった。常任司書がない理由として司書教育の不十分さや行政による図書館への資金削減に伴う非正規雇用の図書館員並びに司書の増加などが挙げられるだろう。

どんな資料も生の声には勝てないとはよく言われることである。私は学校の司書の先生に、日本で司書として働く上でその地位をどのように捉えているかを聞くことにした。その一部を紹介したいと思う。

「やはり図書館先進国の欧米に比べて、日本では司書を専門職と考える意識が低く、専門職としての威厳を保ちにくいように思います。その理由に、司書は専門職であるのにも関わらずその教育が乏しく、また資格が取りやすいという点があります。加えて、図書館自体の運営の不安定さも問題です。働いている側も賃金や雇用の安定、キャリアアップが見込めなければ、なかなか専門職としての意識や誇りを持ってまじからぬ。それでも熱意のある司書がたくさんいるから、今日も図書館が運営されているのだと思います。」

そう答えた彼女は、学校司書となる前は公共図書館でアルバイトや臨時職員として働いていたという。そこで当時のことも詳しく伺うと、意外すぎる答えが返ってきた。「そこでは司書資格は必要なかったため、資格を持っている人がほとんどいませんでした。公務員としてたまたま図書館に配属され、働いていた人が多かったからです。その人たちは三〇五年で別の部署に移動していきました。」

司書になるために資格を取ったにも関わらず、いち公務員として他の部署に配属され、逆に資格を持っていない人が図書館業務を任されている、そのような理不尽なことが日本では日常的に起こっているという。初めに彼女が言った「司書としての威厳を保ちにくく感じる」という意味がようやく理解できた。

一方で、日本と比べると海外では司書の地位が確立されているところが多い。例えば、欧米ではボランティアやアルバイトが司書業務に携わることはいずれも好ましくないと考えられている。実際ノルウェーでは、ボランティアやアルバイトは宿題支援サービスのような例外的なもの以外は関与することを禁止されている。司書は専門教育を

受けたプロフェッショナルが行う業務、という認識が国民の間で広くされているからである。第五章でもノルウェーの既存の制度を紹介したが、ノルウェーでは図書館として司書に対する社会の理解度が非常に高い。これが日本との差である。

ここで私は日本における司書の地位向上並びに司書教育の見直しを提案したい。例えば学校における司書の有無は教育の面で大きな影響を与える。つい先日、ある学校で著作権侵害の問題が起きたという話を聞いた。学校の展示品で某有名キャラクターを許可なく使用してしまったというのだが、外部の司書に指摘を受けるまで誰も気づかなかつたという。その学校では専門教育を受けた、きちんと資格を持った学校司書がいなかったのだ。司書教育の手薄さによる問題が顕在化した瞬間であった。学校図書館法より、現在の日本では学校司書は「置くように努めなければならない」と定義されている。残念なことに司書の設置が義務化されていないのである。二〇二〇年度、私達の学年から現在のセンター試験が廃止となり、新たに大学共通テストという制度が導入される。一人ひとりの経験が重要視され、そこから得られた豊富な知識・

意見が反映された試験展開がされるといふ。また以前消滅したはずの公共図書館や博物館を管理していた社会教育課は、平成二十九年に再編成された。これらのことから、ようやく国も体験型の教育に力を入れ始めたと言える。司書がない図書館ではきちんとしたレファレンスが受けられない。情報が氾濫している今の時代、一人ひとりにそれを処理する能力が問われ始めてきているが、本格的なレファレンスを受けることは人々の情報処理能力の向上につながるのではないだろうか。

【第七章 サービスの無料化】

ところで、公共図書館というと、無料で様々な設備やサービスを利用できるというイメージがある。しかし、オランダの公共図書館では利用カードの登録や本の取り寄せなどいくつかのサービスが有料になっていく。設立当初から有料だったためそれがそのまま残っているというのが理由だが、その根底には「無料であることでサービスがないがしろにされることを防ぐ」というねらいがある。現在日本では行政による図書館への提供資金が大幅に削減され続けている。実際に資料費は一九九九年から二

〇一七年の間に二〇%削減された(※4)。

このような状況であるため、日本の図書館も有料にするべきであろうかが議論される。図書館は誰にでも無料であることによつて、意思のある者の学ぶ自由を保証する。いつの時代も、成長し続ける者だけが生き残ってきた。我々日本人も、日々成長し続けなければならぬ。国民の成長は国の成長につながる。図書館は、国民が成長するための手助けをするべきである。ゆえに日本の図書館はこの先も無料でサービスを提供し続けるべきだと主張したい。

【最終章 図書館の存在意義】

本稿を書くにあたって、様々な場面で「つなぐ」という言葉が脳裏に浮かんできた。技術の発展により、将来的に図書館はなくなり、電子図書館が主流になるのではないかと考える人がいる。確かにそれはそれで便利かもしれない。しかし、ただ情報を提供することだけが図書館の役割ではない。

九月一日は学生の自殺が増えるという。「学校が始まるのが死ぬほど辛い子、学校を休んで図書館へいらっしやい…」ある司書がSNSにて発信したこの投稿は大きな

反響を生んだ。言葉を交わさずとも人の温

もりは感じられる。人を包み込む暖かさが図書館にはある。そこでふと手にとった一冊から人生が変わることもあるはずだ。私には将来編集者になつて自分の本や雑誌を作りたという夢がある。自分が編集したものが図書館に置かれ多くの人の目に触れながら長く後世に受け継がれ、いつの日か誰かの心に届いたならばこれほど嬉しいことはない。私にとつて図書館は夢をつなぐ場所である。人と人をつなぐ、人と文化をつなぐ、人と世界をつなぐ、そして人と未来をつなぐ。私は、図書館の重要性を論じ、これからの図書館のあり方について一石を投じたいと思っている。私がこのテーマで論文を書くことで、図書館に対する意識が少しでも変わつてくれたならば本望である。そしてこれを多くの人に読んでもらうことこそが、私なりの自我作古である。

〈注〉

(1) 慶應義塾大学HP / 八月十一日アクセス

<https://www.keio.ac.jp/ja/about/philosophy/>

(2) 慶應義塾大学HP / 八月十一日アクセス

セス

<https://www.keio.ac.jp/ja/about/history/encyclopedia/9.html>

(3) 朝日新聞グループ / 二〇一三年八月十八日号 / 四ページ

(4) 竹内哲「生きるための図書館」一人ひとりのために」一〇五ページ / 岩波新書 / 二〇一九年六月二十日発行

行

〈参考文献〉

・ 竹内哲「生きるための図書館」一人ひとりのために」岩波新書 / 二〇一九年六月二十日発行

・ 菅谷明子『未来を作る図書館』ニユーヨークからの報告 / 岩波新書 / 二〇〇三年九月十九日発行

・ 鎌倉幸子『走れ！移動図書館』本でよりそう復興支援 / ちくまプリマー新書 / 二〇一四年一月十日発行

・ マグヌスセン 矢部直美、吉田右子、和氣尚美『フルウエーの図書館』物語・ことば・知識が踊る空間 / 新評論 / 二〇一三年五月十日発行

・ 吉田右子『オランダ公共図書館の挑戦』サービスを有料にするのはなぜか？ / 新評論 / 二〇一八年九月二十日発行

- ・『現代思想 特集・図書館の未来』／青
土社／二〇一八年十二月号
- ・映画「ニューヨーク公共図書館エクス・
リプリス」パンフレット
- ・「おもしろ図書館であそぶ」／毎日新聞
社／二〇〇三年三月二十五日号
- ・朝日新聞グローブ／二〇一三年八月十八
日号
- ・公益財団法人アジアアフリカ文化財団
HPA／八月十一日アクセス
<https://www.aacf.or.jp/about/>